

平成22年度 外部評価委員会議事概要

1：日時 平成23年3月1日(火)

2：場所 松江工業高等専門学校 会議室

3：出席者

外部評価委員

高等教育機関関係

柴田 均 氏 島根大学 理事 副学長
森 朋子 氏 島根大学教育開発センター 准教授

地方自治体関係

山根 泉 氏 財団法人しまね産業振興財団 副理事長

地域教育関係

矢野 博 氏 島根県中学校長会長 松江市立湖東中学校長

産 業 界

今岡 克己 氏 松江テクノフォーラム理事
株式会社ワコムアイティ 代表取締役

本校関係者

陶澤 真一 氏 松江高専同窓会 副会長

本校出席者

- 1) 荒木 光彦 校 長
- 2) 高橋 信雄 副校長 (教務主事)
- 3) 東原 哲男 副校長 (管理運営担当)
- 4) 宮下 眞也 校長補佐 (学生主事)
- 5) 福間 眞澄 校長補佐 (専攻科長)
- 6) 飯島 睦美 学生相談室長
- 7) 齊藤 陽平 寮務主事補 (*森田寮務主事代理出席)
- 8) 仮野 宏 事務部長
- 9) 塩田 芳夫 総務課長
- 10) 梅田 則好 学生課長

4：日 程

開 会

1. 校長あいさつ 13:30
2. 委員長及び委員紹介 13:35
3. 本校出席者紹介 13:40
4. 松江高専中期計画－教育に関する目標について－ 13:45－13:50
(副校長 (管理運営担当))
5. 教育に関する活動状況報告
5. 1 本科の教育活動, 専攻科の教育活動 13:50－14:20
(20分) (10分)

【質疑応答1】	14:20-14:40
5. 2 学生支援・指導活動	14:40-15:00
学校生活, 寮生活, 学生相談	
(10分) (5分) (5分)	
【質疑応答2】	15:00-15:10
6. 委員のみによる意見交換	15:10-15:20
7. 委員による講評	15:20-15:30
8. 校長謝辞	15:30
閉会	

5: 議 事

松江工業高等専門学校外部評価委員会規則第5条第1項により、委員長に柴田島根大学理事を選出した。柴田委員長の開会挨拶後、荒木校長挨拶、委員の紹介、出席者の紹介があった。柴田委員長から、日程について説明があった。

松江高専の教育に関する目標、活動状況について、資料に基づき下記のとおり本校から説明があった。

- ・「第二期中期計画 平成22年度計画と自己評価」 → 東原副校長（管理運営担当）から説明
- ・「本科の教育活動」 → 高橋副校長（教務主事）が説明
- ・「専攻科の教育活動」 → 福間校長補佐（専攻科長）から説明
- ・「学校生活支援・指導活動」 → 宮下校長補佐（学生主事）から説明
- ・「寮生活支援・指導活動」 → 齊藤寮務主事補から説明
- ・「学生相談支援・指導活動」 → 飯島学生相談室長から説明

松江高専の説明後、以下の意見交換・質疑応答等があった。

○：委員の質疑・意見等 △：本校側の説明・意見等

○ 昨年と今年、私どもで職員採用試験をやったのですが、受けている者は人文系、社会科系、理科学系の学生で、それぞれ学力が高いのですが、一つ気がついたことがありました。それは数学とか国語とかあまり専攻した分野で得点が違わない、あまり変わらないということです。

それからもう一つは、これは非常に重要だと思っておりますけれども、一般常識、社会時事常識です。このあたりの得点は極めて低いのです。学生は特に新聞を読んでいないのではないかと気が起ころうらい低いのです。一つの会社というコミュニティの中で働くわけですから、その一般常識的なものは、きちんとしたほうが良いのではないかなというふうに私は思うのです。そこら辺で、何か高専のほうで取り組みをされているならばお聞かせいただければと思います。

△ なかなか一般常識を身に付けさせることは難しく、新聞を読まない、新聞を読まなくてもインターネットでほとんど情報が入ってきている形になりますから。その辺りを、どうインターネットで得られない知識に繋がるものを、本の中とかに向けさせるか。本もまた IT 化されるのでまた違ってくるのかもしれないかもしれませんが、新聞を読まないことは非常に感じています。ただ、一般常識よりも、それ以前の行儀作法です。そこら辺を、かなり学生委員会を中心にやってきたので、今、松江高専自体は自然な挨拶ができるようになってきていると私は感じています。そういったところから、次は一般常識ということにいかねばならないという気はしています。

△ ご質問は高専生の一般常識が低いというのではないのですね。

- はい、そうではありません。
- △ アンケートにある一般常識というのは、今おっしゃったように時事問題が一般常識というのではなく、時事問題と行儀作法の間ぐらいが一般常識だと思います。
- △ よく色々なところで雑談として言われることは、高専生は遊んでいない、ということです。大学生は遊びの中で得るものが多く、高専生は割ときちんとした教育をして鍛えてはいるのだけれど、遊びの部分がないところが、このアンケートには結果として出ているのかなと感じています。
- ラーニングティーチングという授業で、先輩たちと同じ場に行って色々なことを教えてもらおうと、その中には授業のテキストに書いてあること以外の、たくさんの経験をすることができ、大事な場であると感じられました。

-
- 寮にはどのくらい入っているのですか。
 - △ 390 人います。
 - その中でまた新たな先輩、後輩とかコミュニティみたいなのができますね。
 - △ 以前は指導寮生という形で低学年のフロアに高学年の寮生がいたのですが、そういうことは上下関係、悪い意味での上下関係を助長するというので、大分以前にそれが撤回されました。
今は、号館ごとで同じ学年が住むという状況になっており、また、この後寮からの話でその辺をどう改善していくかという話をさせていただきたいと思います。

-
- このあいだニュージーランドで地震が起こって、日本人の留学生がたくさん犠牲になられたのですが、看護師さんが海外で活躍するために語学を勉強に行っていたと報道されました。高専出身の技術者も海外進出をしているということですが、高専生の語学力というものがデータで出ていたのですが、大学生と比べてときにやや劣るという結果が出ていました。特に高専の5年間をかけて語学力をつけるというカリキュラムを考えていらっしゃるのでしょうか。
 - △ 英語科独自のカリキュラムということで、中学校から受け入れた 15 歳の学生から始まって、効率良く身に付けるような形でカリキュラムのほうを編成しているつもりですが、今おっしゃいましたように、大学生と比べて、ということはどこでも私どもが非難を受けるところであります。やはり、間に大学受験が入っていない、大学入試がないというのは、一つの高専の弱みでもあります。というのは、英語という科目はご存知のように、意識で留めていかなければならないという部分がありまして、その学んだことを、しっかりと前に目標を持って、意識で獲得して留めていくということがなかなかできないといったところが弱みです。ただ、本校では低学年では英語検定を推奨していますし、あと4年生以上では、英語を受講している全員が受験ということで義務化しておりますので、平均点については、徐々に向上をしているところであると認識しております。
 - △ TOEIC について追加します。本校では、英語教育に関しては大学受験がないということで、やはり単位を取ることに意識していますので、日々の英語教育、英語学習が非常に不足していて、定着しないという状況が続いています。確かに TOEIC の点数ですと今年の平均点が、4年生以上がほぼ全員受けていますけれども 380 点ぐらいです。他の高専に比べてちょっと良い感じですが、語彙力がありません。センスでもっていくという感じです。実際に使えるかどうかということになると、使えない状況で卒業していくと思います。大学生のほうも同じような平均点だと思いますけれども、大学生のほうに語彙力があるということで、就職したときに差があるということは、やはり語彙力の差が顕著ではないのかなと思います。

TOEIC の平均点だけ見るとあまり差はないのですが、語彙力の差は大きい、定着していない形です。ただ、今年度、4年生の中で 800 点を越えたものが 2 人、700 点を越えたものが 10 人ぐらいおりますので、徐々にそういう海外進出への意識ができていっているのではないかと考えています。

- △ 平成 18 年 5 月に OECD の訪問があつて、学生に英語で喋らせていただきました。その英語、つまり、上位の学生の英語を聞いている限り、京大の新入学生と本校の 2、3 年生とそんなに変わらないですね。だから、上位の学生は、多分前の晩に徹夜で仕込まれたのだと思うのですが、できないことはないのですが、印象としては自信がないように感じます。英語についても自信がないし、一般

常識もないというよりは、ないと思っているのですね。

時事問題というのは確かにその時々によろがないといけなくて、1年間新聞を読んだかどうかで変わってきます。それ以前の常識というものが、高専の中だけで育っているとどうしても高専の常識に固まってしまい、高専の中では常識がある者でも外ではちょっと感じが違ってしまいます。他の人も感じが違うなと思って見ることと、本人も自信がないものだからそれがフィードバックになってしまって、あのような評価に繋がっていく側面があるように思います。

-
- 卒業生と言うべきか、学生を見守る側の立場なので、ちょっとフォローを含みますけれども、実際にやる職務が製造会社などということになりますと、海外に行って活躍してくれる人に一番必要なのは、専門の力で語学力はどちらかというところと、その辺をしっかりとわかっている人は、なんとかなるというのが一つです。

それともう一つは責任感というか意欲というか、そういったものをきちっと持っている人間はやっていけるというのが私の実感です。今回、教育の中で、大学卒と高専卒の比較というものが出ておりましたが、全くそういう感じだと見ておりました。これは良い点が非常に突出している面もありますので、何を目指すかというところと、何を高専生に望むか、高専卒業生がどういった役割を社会にしていけるかというところのマッチングだと思います。この辺がある意味で高専の位置付けとか、カリキュラムとか、機構の中期計画とか、そういったところもひっくるめて、高専全体としての在り方とか、学生に求めるものから少しずつ変えていかないといけないことになると思います。私の立場から言うと、半分以上は高専生の良い点かなと、やはりそこは残して欲しいと思いますし、弱いと言われるところは強化していただきたいと思います。そういう意味では、この比較のところについては、もう少し高専機構全体としてはどういうふうに変えていくのかということを考えられたら良いと思います。

- △ 語学のコミュニケーション能力プラスαでなければ、同じ限られた時間の中でどちらかを減らして、ということではではありませんので。松江高専に限らず全国の高専卒業生に対しての評価ということであれば、高専の教育システムが誠実であるとか、責任感がある、ということを作り出しているという気がしています。そういう中で、更に少しプラスαを作れば、本当に良い、期待される技術者になるのではないのかなと思います。
- 色々な、本来の授業以外にもたくさん取り込んでいかなければならないようですから、そういう一般的なこととかが身に付いてくると思います。継続してやられれば非常に良いと思います。

-
- 高専卒業生が私の会社に何人か来ておりますし、親会社のほうも中心的メンバーはほとんど高専卒業生ですし、会社のトップのほとんどを高専出身のメンバーが作っているのは事実です。私の会社もやはり高専出身が中心になっております。アンケートの高専卒と大学卒の比較というものが、同じ学部の人間の比較なのか、一把一絡げに受け皿も何も全部ひっくるめての比較なのか、となってくると、また違った見方があると思います。そして工学系の学生たちだけの比較であれば、また違った面が出てくると思いますし、またこういう学生たちを創るとというのが、本当に高専の元々の多分主旨、国の目的だったと思うのです。

実際、コミュニケーション能力がちょっと不足しているなどと言っても「これをやるんだ」と言われたことに対して、それを「うん」と受け止めてやる力というものは抜群なものがあります。大学出身者は、大学を出て遊んでいるのか、学生からすると上司をごまかしている、手玉にとってそつなくこなしている。しかし高専出身のまじめな者は、きちんと見通しを持ってやっている。その強さというのは凄まじいものであって、これはこれですごいものがある。会社としては使いやすいというか非常に強力な武器になるメンバーが育っていると思っています。ですから、この表だけで論じられないと思います。こういう学生が育っているのだということをもっと堂々と胸を張って世の中にアピールすべきだと私は思います。

それから、専攻科に進学する学生たちが増えているとありますけれども、ここに定員と実際に入っている数が1.6倍とあります。そもそも定員が何なのだという疑問と、当然定員があるということはそれ

に応じた予算しかついていない、それに応じた設備しかないということになってくると、十分な教育環境なのかということが非常に不安になりました。ここにある定員というのは、学校側や国としてはどう考えていらっしゃるのかということをお聞きしたいと思います。

△ 定員の話ですけれども、国としてはどう考えているのか知りませんが、専攻科用の予算は全くありません。

実を言うと定員を多く設定しても、勝手なものだから1.6倍とろうが2倍とろうが、文科省も文句を言わない。予算を付けていないから、結局、各高専でやれる範囲でやってください、と非常に無責任な制度と言えば制度です。高専としては専攻科があったほうが、高専全体がやはり活性化するというか、先生方の研究も活性化するし、本科生の指導にも使えるし、色々な面でメリットがあります。それから、専攻科へ行ける、ということで本科生も喜んでいるところもあります。要するにあまり多くなり過ぎて、やっていけない程度ならどうだろうか、ということになっていると思います。

△ 専攻科生がいるようになってから研究らしくなりました。卒業研究が研究らしくなったのも事実です。やはり、毎年卒研生は替わっていくものですが、継続性がなかったり、レベルが上がらなかったりとかしていたのですが、専攻科生がいるようになってから研究の質も上がってきて、わずかながらですけれども、その地域の企業さんとも色々な研究ができたりするのも、専攻科生のおかげだと思います。ただ、先ほど説明があったように全く手当てがありませんし、教員の数は全く同じでやっているのに、教員は非常に忙しいです。専攻科生も非常に忙しくて、みんな時間がない中で何とかやっているようなところなんです。余裕があまりなく、専攻科生も大学生と同じように就職難の状況ですので、早く就職活動が始まってしまったために、研究がそこそこになって就職活動に向かうとか、先ほど言ったようにエンジニアリングデザインという類もしっかりとやらなければならないので、彼らにとってみると本当に忙しい毎日を送っています。教員も学生も非常に忙しい中で何とかやっているというのが専攻科の実態です。

○ 二点確認をさせていただきたいと思います。まず一点目ですが、拝聴しまして5年間一貫教育の良さが大変よく出ているというふう実感しております。大学生と無理して比べる必要があるのかと思いますけれども、人材育成も専門分野も違いましたし、ライフスタイルも違うというのであれば、多分差別化していくほうが私としては高専生の特徴が活きるのではないかと考えています。

本科生ですけれども、5年間一貫教育の良さもあれば、デメリットもあるだろうと思います。先ほどお話がありました、高専の中で閉じてしまうということに関しては、例えば低学年と言われている学生さんが、他の教育機関との交流とか、また上級生と言われている4、5年生が他の大学の学生と交流があるのかどうかお聞かせいただきたいと思います。

二点目ですが、先ほどお話がありました、底上げの教育とあとは上を伸ばす、この2つは本当にそのとおりだと思います。底上げに関しましては、ともかく頭が下がるぐらい大変素晴らしい取り組みが一杯あるなと思いました。今日はお話を聞けなかったのですが、ラーニングティーチングのようなティーチングに関しては、学力向上だけではなくて、学識力ですとか社会人基礎力の育成ということに大変効果があると思います。学びながらそういうものを学んでいくような教育を、PDLですとか、教育方法としてそういうようなものは当然ながらあると思っています。その場合、産学連携による実践型人材育成事業も去年から始められているようですが、このような講義だけではない授業がいっぱい展開されていると思いますが、その辺りも少しお聞かせいただきたいです。

△ 低学年、高学年が他の学校と交流がどうかというご質問については実のところあまりありません。低学年であるとすれば、高等学校の体育関係の大会です。要するに高体連の大会に参加させていただいて、そこで高校生と交流するぐらいです。

高学年あるいは専攻科については、学会発表等で大学生あるいは大学院生との交流があると考えておりますが、それ以外で何かありますでしょうか。

△ 低学年は教育関係ではありません。10年ぐらい前から、同じような視点で1年生だけは各学科ごとに入試は受けるのですが、1年生の場合は1年間だけは1組から5組に再編成しています。専門の授業は少ないです。あとは個人に対して少しでも目を広げること、あるいは学科によっては女子学生が1人だ

ったりすることがありますので、友達関係を考えて、10年以上前からやっています。他機関との交流については、まずありません。

- △ 社会奉仕とか、それから学校関係、部活とか街の中でイベントをやりますね、そういうときに島大の outlet と隣り合って店を作る、そんな程度ではないかと思います。時間的にも授業が遅くまであって、少し遅れると6時ぐらいになって、部活動をやったあとは家に帰ることになりますから。

○ 産学連携について、ご説明いただけますか。

- △ 卒業研究の中にその地域の企業のニーズを取り込んで、それをテーマにして卒業研究をやっています。また、専攻科に進学し、そのテーマを引き継いでやった場合結構上手くいっているものが4~5件あるのではないかと考えています。

私のところでやっているものもそうですし、色々なものが地域の企業さんのニーズに併せていくと、実践で使えるようなものが何点か残るのかなと思います。そういう点では地域のニーズを取り込んだ卒業研究というのは、上手くやると地域貢献にもなるし、学生たちの自信にもなる、非常に器用なコミュニケーションも取れます。実際の生活の中で特にということではないが、必ず上手くいくものはそんなにないので、その辺は難しいところです。

- △ 企業の方に来ていただいて1回ぐらい講演会をしています。
- △ 聞ける学生には聞かせると非常にプラスになっています。

【委員による講評】

- 今日は教育のところの窓を開けたという説明をいただきましたけれども、非常に取り組みとして素晴らしい取り組みができていて、学生が1年経つと非常に良い成績を修めているというところを良く理解することができました。日常の学校の取り組みがそういった全国の平均レベルに対して上回る結果を出しているということが皆様の努力の結果ではないかと思います。

逆に最後のところで報告がありましたけれども、寮生の学習の問題であったり、食事を摂らないという問題であったり、それから発達障害の問題など、日常そういうこともあるのだという、そのギャップを感じました。現実的には色々な問題を抱えながら悩んで色々な努力をされて、このような成果を出されているということが良くわかりました。大変良いことをしていただいていると感じました。私も卒業生なので寮にもおりましたし、一言申し上げると寮は厳しかった。学生は勉強さえしていれば良かった状態でしたが、今の学生は非常に色々な面でケアが行き届いているので、是非学生も頑張っ

- 私も子供が4人もいるものですから、小学校から始めて中学校、高校と、何度もあらゆるところのPTAの会長、副会長をやっておりますけれども、過去の20年近い経験からするとこれだけの環境、そしてこれだけのサポートのある学校というのはまず見たことがない、素晴らしいものだと思います。高校、大学を含めてきちんとされているのは滅多にないと思います。

それから、実は今日ここにバッチを付けて来ているのですけれども、これが発達障害の子どもを支援する、そういう支援のバッチということになります。今、島根県言葉を育てる親の会というのがあります、そこの会の会長をさせていただいております。県内の通級学級と言われる、昔でいう特殊学級あるいは色々な障害者の学校とは違う普通の学級とのちょうど中間、グレーな子供たちをサポートする通級学級というもので、そこの先生方、そこに通う親御さんを含めて県内300名を超す方々の会の会長もやっております。そういう子供たちが割りと増えていて、大体クラスを見回しますと7%ぐらいはそういう子供たちがいる小学校や中学校の先生方もいらしていらっしゃいます。我々の頃は空気が読めない子どもとか、なんで急に暴力を振るうのだとか、漢字にルビを振らないとどうしてわからないのだ、などという言い方をしましたが、ディスレクシアと言いますか、そういう子供たちもいます。

ですが、そういう中には特殊な才能を持ったりする子供たちがいて、数学とかはN次元の方程式が頭にイメージできるのは、普通我々からすると考えられないのですけれども、でもそういうことがわかる子供たちがいたりして、一概にそういう子供たちを問題があるとは言えないと思います。是非そういう子供たちも温かく包んで、またそういう特殊な才能を育てただけであれば本当にありがたいと思います。

松江高専には親の会のお子さん達たちが何人もいます。そういうお子さん達も心配しながら送っておられますので、言葉を育てる親の会は微力ですけども役に立つことがあればいつでもお手伝いしますので、よろしくをお願いします。

- こうしてお話しを聞かせていただいて、改めて教育の質の高さということに関して感銘を受けております。特に中学卒業後の生徒を受け入れて、中等教育をしながら高等教育に繋げるということに関しては先生方の負担は相当大きなものであると思いますし、また細やかなケアを大切にされていることを思った上で、もう一度、もしよろしければご検討いただきたいことは、教育方法の話です。

先ほど、高専の持つ独自性ということについてもっと進めていったらどうか、ということでお話をさせていただいて、その中には基盤となる学力の高さとか、信頼性などがあると思います。ただ、私ども島根大学の抱えている問題を考えてみたときに、今一番大きな問題は高大の接続、どうしても大学入試の弊害というのが大きくありまして、多くはミスマッチです。高校の指導側からできるだけ高い大学に、本人の意思に関係なく選ばれるという問題であったり、詰め込み型にどうしてもなりますので、大学に来てから学びの転換ということを進めておりますけれども、なかなかできません。教えてもらうことに関しては対応できますけれども、自分で何かを見つけたり、問題発見をしながら勉強をすることがなかなかできない。こういうことを、私どもの教育の世界ではアクティブライニングという言い方をしています。能動的な学習と日本語では訳します。

先ほど、お聞きしたことにしましては、専攻科の研究でされていることですが、もし他の高校ではできないということ言えば、高専生の場合は低学年からそういうアクティブライニングを初動から取り組むということで、大学ではなかなか難しい教育を高専だからできる、というような方法が独自性をアピールする一つの方法かなというふうに思います。

先ほど、卒業生の調査等を拝見いたしましたけれども、講義形式ということでアンケートを取られていますが、これが実験等でしたらもっともっと満足度は高いはずで、自己達成感も高いはずで、そういうことを積み上げていくことで、学生の自信にも繋がっていくということですので、私ども大学教育の専門家ですが、島根大学と高専だけが松江市にある唯一の高等教育機関ですので、そういう意味ではまた色々な連携をさせていただき、勉強もさせていただいて教育方法等の開発も必要である、というふうに、改めて私どものいるセンターの役目というものに関しても重責を感じたところです。

発展的な傾向を申しましたけれども、教育の質の高さがあり、どちらかと言えば島根大学ではできない思い切ったものも高専ではできるのではないかと期待を込めて申し上げた次第です。

- △ 卒業生アンケートに関しては、講義形式しか取っておりませんが、実験についてどうだったか、あるいは卒業研究についてどうだったかということも調べておりまして、どの項目についても満足度は大体75%ぐらいであり変わりません。

- △ 私たちは平成15年くらいから新入生に対するアンケートを行っています。なぜ勉強するのかということに対する答えが私たちは一番気になることです。勉強は何のためにするのか、といったアンケートを新入生のオリエンテーションの際に実施しています。これでもって何がわかるかというと、勉強というものは功利性と言うか、これを勉強すると得するけれども、しなければ損をするということで行うのか、あるいは、結果面白いのだよということで行うのか、といったことです。その結果を調べますと、大体同じ傾向があって、特徴的なのは実用思考が非常に強いということです。つまり勉強は何のためにするかと問われたときに、将来得をするため、何とかなるためということなのです。そういう学生が、

実は今の世の中に多いのかなと思います。いずれにしても高専に入ってくる学生たちはこういう思考を持っている。そうすると彼らに対して学びの先に何があるのか、と一言をいかにして私たちがアピールできるか、ということが私たちに問われているのだらうと思います。そこが普通高校に高専が勝てるチャンス、つまり私たちは学生から、何のために勉強しなければなりませんかと問われれば、これを勉強したらこんなことができる、ということを示したり、あるいはプログラムで示すことができる。そこの辺の強さがあって、そこから初めて私たちは上手くいけば本当の意味の学習力を引き出すことによって、受験勉強ではない学習が高専こそに残っているのではないかと確信できる気がしています。終わりになりますが、一つの方法として校長が本を出版していることなども学べる先にあります。たまたま縁があって高専に来ただけれども、君たちが今勉強をしている先にはこんな世界があるということをお教えることができる一つの学習動機に繋がっているような気がしています。

△ PPLに関連しますが、例えば私たちの強みということで1年生から実験実習をやっていることと、それから2年生、3年生のところミニミニプロコンであるとか、そういったものを必ず授業の中に入れてやっています。実は教育目標の、学んで創れるということは、学ぶことと創ることを繰り返しやっていて、スパイラル状で最後はPPLになるということをお授業の中で具現化していこうということで、PPLまではいかないですけども課題に対して自分で考えていくという話を少し大げさにしました。

○ 先ほどから松江高専の教育と学生の生活支援、大変きめ細やかな対応をしていただいていることを伺いました。実は今回、初めて知ったということもございます。引き続き取り組んでいただければと思っております。

言うまでもありませんけれども、松江高専の卒業生を企業のみなさん方は大変優秀であるということが高く評価されております。県内はもちろんそうなのですが、県外に行っても企業の説明会等をやっても、松江高専の卒業生さんの優秀さというのを、大変何度も耳にいたします。それなりの伝統がある松江高専だと思いますので、その道をこれからも真直ぐ進んでいただきたいと思っております。

私どもの産業振興財団、今の北陵町へ移転して今年で10年になります。もう一回原点に戻って、産学官連携を考えてみたいと思っております。松江高専におかれましては、この間、産業人材の育成ということで大変ご協力をいただいております。この場をお借りいたしまして改めてお礼を申し上げたいと思っております。先ほどの企業の人材育成ということで、お話ししていただいておりますけれども、高専の学生さんと社会を結びつけるということでも、私どもがやれることがあるのかなと思いつつながら、先ほどの説明をお聞きしておりました。10年目という節目の年でありますので、そういう面で私どもが何かお手伝いすることがあれば、何なりとお申し付けいただければと思っております。またこういうことをやって欲しいということがあれば、どんどん言っていただければと思っております。

○ 私が最後になりましたけれども、たくさんのデータ等を見ていただいて松江高専の教育に関しても、学生生活支援に関しても、本当にきめ細やかに取り組んでいらっしゃると思っておりました。そして日々細やかに取り組まれるということは、先生方の負担が非常に大きなものがあるのだなとつくづく思いました。専攻科の先生方は専攻科の予算がないという話を聞いて、ご苦労をなさっているなと思っておりました。ご苦労はあるものの是非全国の中でも立派な松江高専として輝いて欲しいと思っておりました。

また、私は送る側として、高専が求める生徒について私たちも自覚をしてこれから中学校教育を進めていかなければならないと思っております。

発達障害の問題もありますけれども、最近のデータだと6%程度だと思っておりましたけれども、そういう子どもも実際に義務教育の中にいますので、そういった点で発達障害を持った子供たちも高専に進学するということも多々あると思っております。そういう面では、また高専の先生方と連携を取りながら情報提供をしながら進めていきたいと思っております。本当に今日は感心させていただきました。ありがとうございます。

- それでは、他の委員さんから出なかったことで、一つだけお尋ねしたいことがあります。
全国の国立 51 高専 55 校舎があつて、連携をしていないということが疑問でございます。学生さん同士がここで会うぐらい、というふうではせつかく 51 校になられたメリットが出ないのかなというふうな気がいたします。学生を動かすことは大変だと思いますけれども、そのような印象がありました。
また、島根県出身で島根県に就職される人というのは、毎年どれくらいでしょうか。常に経済界からそういうふうな数字が出てくるのですけれども。
- △ 島根県出身の入学者の割合が 95%です。
△ ですから、全員島根県出身と考えていただいて良いと思います。広島県が少しいますけれど、ほとんどが島根県です。
- 県外へ就職したというのは、島根県の優秀な学生さんが流出していることになりませんか。
- △ 少し言い訳をさせていただきますと、求人数が全然違います。島根県の企業で求人が 100 人くらいです。その中に 50 人くらいが就職します。だから、充足率は 2 人に 1 人が就職します。県外の求人があるかということは、年によって違うのですけれど、1,000 人を超えています。それに対して 100 人未満の就職ですから、県外は 10 の求人があつて、1 しか行っていない。大雑把に言うとなんかということ
です。
- △ 島根県へ就職したいという希望は、潜在的にあるように思います。あるのですけれど、自分の思わしいような就職先がないというのが現実のような気がいたします。
51 高専の連携ですけれど、色々連携しておりますが、教育に関して言いますと、教科というか教育課程を統一するという訳ではないのですけれど、標準的な教育課目を用意するというものと、他の高専へ学生を連れて行くわけにはいかないとか、それで授業を受けさせるわけにはいかないけれども、eラーニングで連携をしようという動きが段々進んでおります。ただ松江高専は eラーニングで単位を出すようなところまでいっていないと思いますが、それが段々と構築されています。
他には教員の交流があります。なかなか色々な事情でそう簡単にはいきませんが、今年は一人外から教員が来ていますので一人増えています。来年からは一人増えるとどこかで一人減っているのです、お互いが困るからプラスマイナスゼロで交流をしようということを進んでおります。教員交流はそんなところ
です。事務の面ではかなり交流が進んでいます。
- △ 専攻科は規模が小さいので、春に中四国の専攻科生が集まって研究発表会を行っています。400 名くらい集まって行っていますので、かなり大きい交流だと思います。

○柴田委員長

高専生がもっと自信を持つように願っています。ほめてあげてください。

委員の方で特にこの点だけはというものがありませんでしたらお願いします。

ないようでしたら、定刻になりましたので、最後に松江高専を代表しまして荒木校長先生からご挨拶を頂戴したいと思います。

△荒木校長

本日は半日近くお付き合いいただきましてありがとうございます。それぞれ色々な話を聞かせていただきましたので参考にさせていただきます。来年度もお願いするかもしれませんがよろしく願い
いたします。

○柴田委員長

それでは以上をもちまして平成 22 年度松江工業高等専門学校外部評価委員会を終了します。ありがとうございました。